

川野 明正  
(明治大学)

## 1. 狛犬とは

狛犬は中国の獅子の影響を受けて日本で誕生した霊獣である。正確にいうと、狛犬は中国から来た獅子の相方として、天皇・皇后などや神仏の左右を護るために日本で生まれた霊獣である。霊獣像としての狛犬は、本来は「獅子・狛犬」のペアである。『安祥寺資財帳』（恵運〈著〉・貞観十三年・871）には、舞楽で使用する狛犬の頭や皮や尾が記されている。舞楽の「獅子舞」「狛犬舞」の流れを背景に平安時代前期の九世紀に「獅子・狛犬」のペアとして、宮中の間仕切り絵や調度品として獅子像・狛犬像が誕生する。

## 2. 狛犬を通じて学ぶことができる事柄—「旅する霊獣」としての狛犬

狛犬は長い旅をして日本までたどり着いた。狛犬は「旅する霊獣」なのである。狛犬は、神や高貴な人物の左右を護るライオン像の流れの一つである。この種の「対偶」をなす2体1対のライオン像の誕生は、西アジアのメソポタミアにある。

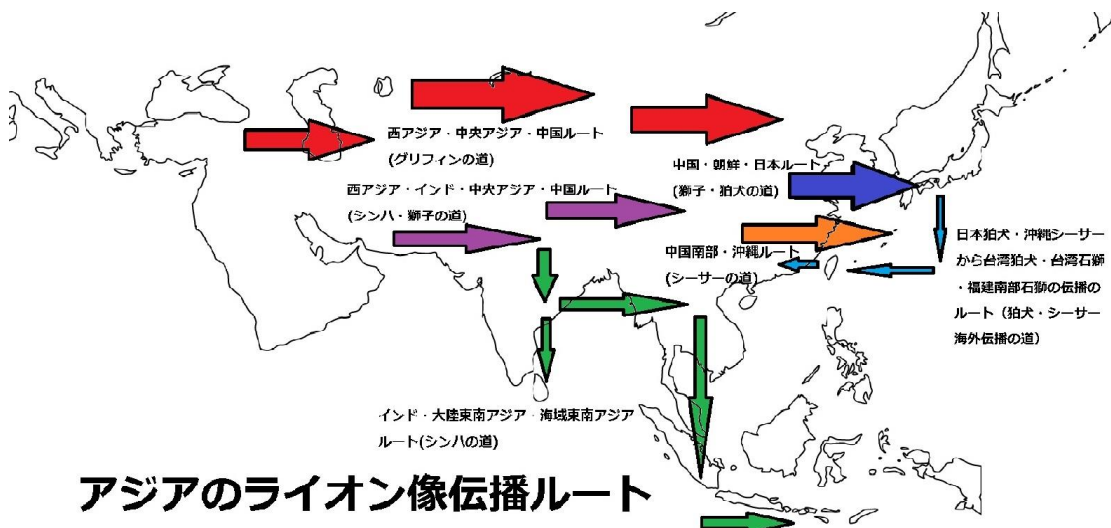
知られうる最古の対偶のネコ科の霊獣像はトルコのチャタルヒュクで出土した紀元前 5750 年前と推測される地母神(大地の豊饒を司る女性神)の像で、今まさに出産する大地の母の身边左右にネコ科の動物が見守る。これは神を護る霊獣の根本的な意義を示す。狛犬的な霊獣像は、その誕生からすでに愛をもつのである。

地母神の霊獣像から愛の姿を知りうるように、狛犬から学ぶことができるものは、様々な事柄がある。以下、3 つに大きく分けて列挙してみる。



チャタルヒュククの地母神  
(出典Wikipedia)

## ア. アジア東西に渉る文化的な伝播の流れを学ぶ



この種のライオン像が日本に至る流れを概観する。グリフィンは、西アジア（メソポタミアは西アジアに属する）から中央アジアを経て紀元前五世紀頃に中国に至る流れがあり、また西アジアからインドに至って、紀元後一世紀頃仏像の誕生とともに、仏像の誕生とともに、左右を護持するライオン像がインド北部のガンダーラやマトゥーラで誕生する。サンスクリット語でライオンを「シンハ」というが、このシンハ像が、仏像とともにガンダーラを通じて中国に入って「獅子」となる。

中国では獅子は当初「師子」と表記され、後漢初期に成立した『漢書』にはじめて書かれるが、中国に仏教が正式に伝来した一世紀にはこの言葉が登場する。これはシンハの音を当てたものと思われる。

それ以前にもインド系のライオン像は、中国で知られていた。シンハ系の言葉の音を当てたと思われる「狻猊」（さんげい）という言葉が、中国最初期の小説『穆天子伝』（成立年代不詳。一説に戦国時代）に、「西域」（中国からみて西側のユーラシア大陸）の動物の名に記される。

日本には、古墳時代の三世半ばから後半の時期、青銅鏡に「師子」（「獅子」）の文字がみえており、飛鳥時代には獅子像が法隆寺などでみられるようになる。

アジアのライオン像は、中国・日本や朝鮮半島では獅子と呼ばれるが、インドから東南アジアに涉り、インド系のシンハ像も「シンガ」と呼ばれるジャワ島のライオン像に至るまで広がりを見せる。かくしてアジアに各地各様のライオン像がある。ライオン像の終着点は、日本の狛犬だけではなく、このようにジャワ島のシンガや、中国から独自に琉球に入ってきた沖縄のシーサーもある。

狛犬は、唐草文様（からくさもんよう）・アトラス（大地を支えるギリシャ神話の人物で、「支える者」「耐える者」の意味）・マカラ（西欧占星術の山羊座・インドの神魚・日本の密教占星術の磨羯宮〈まかつきゆう〉）とともに、東西の文化伝播の流れを覗くテーマでもある。

以上のアジアでのライオン像の伝播の流れをまとめると大別して以下の流れがある。

- a. グリフィンの道＝西アジア・中央アジア・中国ルート
- b. シンハ・獅子の道＝西アジア・インド・中央アジア・中国ルート
- c. シンハの道＝インド・大陸東南アジア・海域東南アジアルート
- d. 獅子・狛犬の道＝中国・朝鮮・日本ルート
- e. シーサーの道＝中国南部・琉球ルート
- f. 狛犬・シーサー海外伝播の道＝日本狛犬・沖縄シーサー・台湾狛犬・台湾石獅（せきし）・福建南部石獅の伝播ルート（4.「結語」に後述）



【地図注記】

アジア獅子・狛犬地図 図版出典:以下の図版を除く図版は、Wikipedia 画像と川野撮影写真による。

- ★1. 「ネパール黄金寺院の雌獅子 (シンギニ)」服部宏昭氏より提供
- ★2. 「マトゥラー初期仏像のシンハ像」(一世紀)東京国立博物館・NHK・NHK プロモーション(編集)『日本・インド国交樹立50周年記念 インド・マトゥラー彫刻展』NHK・NHK プロモーション、2002年
- ★3. 「ガンダーラ仏像のシンハ像」(一〜二世紀)水田徹(責任編集)『世界美術大全集西洋編4 ギリシア・クラシックとヘレニズム』小学館、1995年
- ★4 「エローラ石窟ドゥーマル・レナーのシンハ像」(六世紀中期)。佐藤宗太郎(著)『エローラ石窟寺院』佐鳥出版、1977年

**イ.日本各地の郷土文化の多様性を学ぶ**=この点は、会場でのパネル展示で紹介した。

旅する霊獣である狛犬は、日本全国にも旅をしている。全国津々浦々の神社の参道に狛犬が立ち、各地に伝わるなかで、各地それぞれ独自の形態の狛犬が生まれた。

一言でいえば、「隣の狛犬は形が違う」のである。一例を挙げると、岩手県内の石造狛犬は、二戸・宮古・遠野・大船渡・一関・水沢などなど、地方ごとにすべて形が違う。

また、郷土のありようを学ぶ題材として、狛犬は様々な事柄を教えてくれる。狛犬に彫られた銘からは、石工の制作活動や庶民が狛犬奉納に寄せた祈願の意図(家内安全や海上安全・戦勝祈願など)、地方に狛犬を奉納した商人の販路拡大のありようもわかる。



**ウ.東アジアの世界認識のありようを学ぶ**=狛犬はライオン像がアジア各地を旅して日本で生まれた霊獣像である。だから、狛犬には、アジアでの世界の見方、ありようが少なからず反映されているのである。

獅子・狛犬という組み合わせは、奈良時代から平安時代にかけての、アジアの中華圏での秩序(「華夷秩序」(かいちつじょ))という。「華」=中国・「夷」=周辺民族と国家との関係性についての、平安時代当時の日本の朝廷側の認識が反映されている。

獅子は神仏や天皇などからみて左に置き、狛犬は右に置く。これは、中国での左優位の思想の反映である。中国では祖先祭祀の位牌の置き方は「昭穆」(しょうぼく)と呼ばれる秩序があり、初代の位牌を中央に置き、第2代目の先祖の位牌は初代の位牌からみて左に配置し、第3代目の先祖の位牌を初代の位牌からみて右に配置する。

平安時代後期に書かれた宮中の調度品に関する文書である『類聚雑要抄』(るいじゅうぞうようしよう)(巻四)は、獅子と狛犬の格式と相違について記している。まとめると。

獅子=配置:(神仏や天皇からみて)左置き・色:金色・獣口の開閉:開口・角:無し(無記載)

狛犬=配置:(神仏や天皇からみて)右置き・色:銀色・獣口の開閉:閉口・角:有り



『狛犬さんぽ』のイラスト[川野・ミノシマ 2020]

獅子と狛犬は、このような形で対になって組み合わせられる。左に置く獅子は、当時の中華秩序の中心である中国の正統な霊獣として位置づけられ、右に置く狛犬は、狛が高麗を指すように、中華世界の周辺民族の霊獣として、一段下に置く位置づけがなされている。つまり、獅子・狛犬という霊獣像の対偶の組み合わせは、中華圏の秩序観について、中国と日本を含む周辺民族の関係性か、



中国を一段上にみる観念が現れている。平安時代当時のアジアについての日本側の捉え方が、狛犬に現れている。

### 3.東アジアの風水原理に基づく獅子像—狛犬と別原理の獅子像から見えるアジア

沖縄の村落守護獅子＝「村落守護シーサー」は、狛犬からはみえないアジアでのライオン像のありようの一面を覗く獅子像である。中国を起源とする伝統的土地鑑定法である風水説に基づいて、中国大陸・台湾・朝鮮半島・ヴェトナムに至るまで、シナ海海域に共通する風水原理に基づく獅子像がみられる。沖縄の村落守護シーサーもその一つである。この種の獅子像は単体で設置されるが、狛犬は対偶原理によって設置されるので、それぞれ別個の原理に基づいている。

#### 【風水原理による沖縄のシーサー—狛犬からではみえないアジアの獅子像の死角】

沖縄のシーサーは、中国を起源とする伝統的土地鑑定法であるに基づいて、村落の魔除けとして立てられる村落守護シーサーもあり、中国大陸・台湾・朝鮮半島・ベトナムに至るまで、シナ海海域に共通する風水原理に基づく獅子像がみられる。この点は、狛犬からでは覗うことができない風水原理に基づく獅子像の世界の一端がわかる獅子像である。



八重瀬町新城西の石獅子

### 4.結語—東アジア各地の獅子像に還元する狛犬の展開

狛犬の終着点は日本だけではない。狛犬は海外に再伝播している。一例を挙げると日本統治期の台湾に渡り、現地で台湾型石獅と混合してハイブリッドな獅子狛犬が出来た事例があり、また、台湾で戦後、広島県の尾道型玉乗り狛犬や沖縄県の玉乗りシーサーの影響から、玉乗り石獅が創り出され、大陸側の福建省南部でも流行っている。このように、狛犬が先祖である獅子の形に影響を与えた事例もある。

「アジアから見た狛犬」の展望には、大日本帝国による台湾植民地化と植民地政策による日本神道の普及による台湾宗教文化の変容といった負の局面も考慮しなければならないが、近代以降現在に至るまで、台湾・中国南部に新しい獅子像を創出し、東アジア各地に



沖縄村落守護シーサー (沖縄県与那原町)



石獅爺 (台湾金門島金湖鎮)



石狗 (中国広東省湛江市)



「石獅公」 (台湾屏東県旧廣福村)



石狗 (韓国天安市樂安城邑)



参考:肥前狛犬 (佐賀市伊勢神附社)

還元していく狛犬の姿もある。ここにも「海を渡る狛犬の姿」がある。

【注記】本稿は講演者執筆の以下の文献の内容を解体して適宜取り入れ執筆されている。  
川野明正「アジアから見た日本の狛犬」（小豆島狛犬探究会主催『海を渡る狛犬の魅力』  
講演配布資料、2022年3月26日）  
川野明正「狛犬は旅をする・私も旅をする―〈旅する教養〉の多様なありよう」（岩野卓  
司・丸川哲史編『野生の教養』法政大学出版部、2022年刊行予定）

※ 川野氏原稿に当日の資料画像を一部挿入させていただきました。（山西輝美）